

「宋本 清明上河図」における土木景観の分析＊

A Basic Analysis of Landscape on “Qingming Shanghe Tu”

横松 宗治＊

By Muneharu YOKOMATSU

概要

張昞端によって描かれた「宋本 清明上河図」は、中国北宋末期の首都開封とその郊外の景観を詳細に写しだしている。北宋期は、従来の坊障に囲まれた古代・中世都市を脱し、東アジアに初めて近世都市を出現させた時代である。本絵画には、市民層に開放された都市、経済活動の拠点としての都市の景観が、料理、家具、輸送施設から、建築、土木施設にいたるまで描かれている。今日の都市に繋がる近世都市の景観の萌芽を認めることが出来る。

1. はじめに

中国北宋末期に張昞端によって描かれた「宋本 清明上河図」¹⁾ (図-1) (以下「本図」、「宋本」という)は、最高峰の都市景観絵画として様々な分野の研究者によって読み解く努力が続けられている。本論文では、土木史における萌芽的研究として、他分野の成果を取り入れ、「宋本」の土木景観を分析するものである。本図は、12世紀前半の開封郊外、農村部から都市部に移り変わる景観を、汴河に沿って描き出したものといわれている。分析の対象は、水路(運河である汴河)、護岸、橋梁(図の中心にある虹橋など)、街道・道路などの集落・都市の基盤施設である。本研究を通して、東アジアにおける近世都市すなわち経済都市形成期の都市土木景観を明らかにする。

2. 「宋本 清明上河図」の位置づけと北宋期の都市

史上「清明上河図」を称する中国の都市絵画は、今日知られているだけで約40点存在する²⁾。これらのうち最も古く、その後の諸「清明上河図」の規範となったものが北宋末の、張昞端による「宋本 清明上河図」である。作成時期については、研究によっては若干の異論もあるが、1126年北宋の滅亡直前、概ね北宋末12世紀初頭であろうとされている^{3) 4)}。また、作者については、本図の巻末に付けられた跋文の一部に張昞端作と記されているが、張昞端の人物像は不詳である。

また、本図に描かれた時節は冬至から105日目の清明節である。

本図の地域景観がどこを対象にして描いたのかについては確定していないが、多くの研究者は北宋の首都開封とその東南郊外である推定する。本図に引き続いて多くの「清明上河図」が描かれたが、いずれも本図の基本構成である「田園」、「郊外」、「河と橋」、「鼓楼または城門」そして「市街」を中心的な要素としている。そしてその景観は、描かれた時期の大都市近郊の風景である。特に、清朝乾隆帝の指示によって1736(乾隆元)年に陳枚らによって描かれた「清院本 清明上河図」(台北故宫博物院所蔵)は、都市景観絵画としての精度の高さ、風景要素の豊富さで際立っている。

また、北宋末期の開封の都市風景を文章において詳述した孟元老著『東京夢華録』⁵⁾を合せ読むことで開封郊外の都市風景の理解がより多面的になる。

本図の描かれた北宋は、都市経済、商品経済が中国において発展した時期である。都市形態においても、唐期までの、街区を塙で囲む坊牆制が崩壊し、夜間も人々は居住街区から自由に出入りし、都市が多いににぎわってきた。商品取引は市場に限定されず、街路に向けて店が開かれ、時には路上でも小規模の店舗が設けられた。

3. 「(宋本) 清明上河図」研究の各分野

本図の研究はさまざまな分野で行われている。わが国では以下の研究テーマと研究者が主要なものである。

- ・宋代経済・社会史…伊原弘
- ・絵画史、絵画論…中野美代子
- ・建築・都市史…玉井哲雄、高村雅彦
- ・絵画史料分析…黒田日出男

＊keywords : 清明上河図、絵画分析、都市土木景観

＊ ＊正会員 株式会社日本ランドデザイン

(〒163-1329 東京都新宿区西新宿 6-5-1 アイランドタワー-29 階)

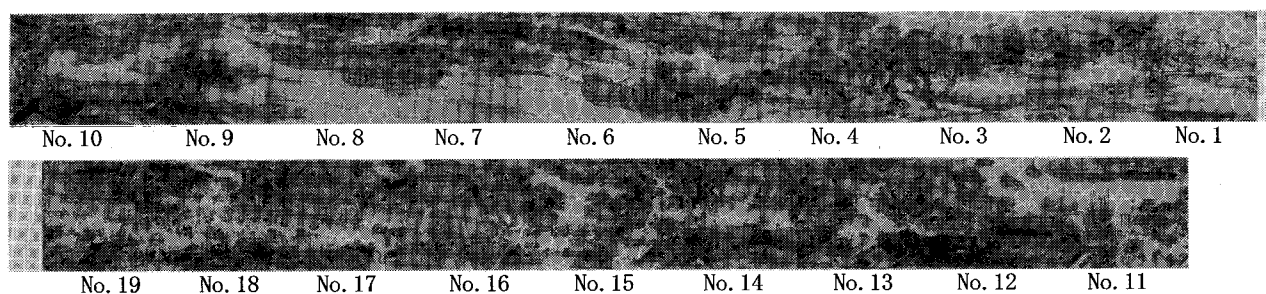


図-1 宋本清明上河図

- ・庭園、植物…木津雅代
- ・船舶史…山形欣哉
- ・飲食史…日下翠
- ・財政史…清木場東
- ・家具史…小泉和子

また、土木分野に関する海外での研究は、

- ・中国橋梁史…Joseph Needham⁶⁾
- ・中国古代橋梁…唐寶澄⁷⁾、茅以昇⁸⁾
- ・虹橋構造の分析…杜連生

など「虹橋」に関する研究があるが、河川（運河）、土地、舗装など土木景観に直接関係する研究は見当たらない。

4. 分析方法

(1) 「洛中洛外図屏風」の都市景観分析の場合

都市景観を対象にして、その構成を同じくしながら繰り返し描かれた絵画に、わが国の中世末から近世の京都を描いた一群の「洛中洛外図屏風」がある。現存する約70点の同屏風について多くの研究があり^{9)、10)}、これらの研究を通じて絵画史料の解読のために幾つかの方法、視点が得られる。

視点の一つは、描かれた時期の違いを通じて、都市の変化を読み取る試みである。16世紀の京都を描いた「町田本」と「上杉本」では京都の中心部のみならず郊外も描かれている。そして、近世初頭17世紀の「舟木本」、「林原本」との間での都市景観の差異を認めることができる。わが国の都市は、古代の都城制の延長にある中世型から、17世紀に入り、近世型すなわち都市経済の発展を基盤にした都市へと大きく変化した。「洛中洛外図屏風」の16世紀のものと17世紀のものとの差異には、この変化が、築地塀、町家（店）などに描かれている。

いまひとつの私たちの研究に関係する視点は、都市景観絵画全体のなかでの求心的な核の構成である。16世紀の「町田本」、「上杉本」では、際立った中心的な核は見られないが、17世紀の「舟木本」、「林原本」では方広寺、二条城という左右にそれぞれ核を持つ。この核が都市景観の主要な対象、当時の関心、都市認識の重点的、象徴的なものと認めることができる。

(2) 「清明上河図」における分析方法

本研究の対象「清明上河図」では、描かれた時期の違いによる対象都市の変化は、「宋本」と明清期の各図を比較することで得られるであろう。時系列的な分析であ

るが、これは将来の課題とし本論文では扱わないことにする。

いまひとつの分析方法は、本図に描かれた土木施設そのものを対象にする。土木施設は、「水路」、「橋梁」、「地盤、舗装」を取り出し、都市施設としての機能、在りかたを分析し、経済都市形成期の都市の全体像を描く一助とする。これが本論文の方法である。

5. 絵画全体の分析

(1) 描かれた都市の歴史的、地理的意味

北宋の首都開封には、この図の描かれた当時100万人を超える人口が居住したと推定されている。江南、山東より大量の生活物資が、主に運河を通じて河船で運ばれた。陸路も整備されていたが、当時の輸送コストは陸運に比べて水運は1/50～1/100という推算もあり、輸送の主な手段は舟運であった。

隋以降各王朝によって長江～淮河～黄河を繋ぐ運河の建設がなされてきた。豊かな江南の物資を華中、華北の都市（政治軍事都市）に運ぶためである。開封は、幹線水路のひとつである汴河（通済渠）が黄河に接続する直前にあり、物資の積み替え地点でもある。北宋以前の首都（漢、唐の長安、洛陽など）に比べて、とりわけ経済的に有利な位置であった。

ところが、この地域の黄河沖積地は、絶えず黄河の氾濫に見舞われ、常に黄河は河道を変え、運河の浚渫を怠ることは出来なかった。（ちなみに、北宋期の都市地盤は、現在の開封市の5～10m下にあるといわれており、当時の建築・土木遺跡の発見は困難を極めている。）

このように開封は経済的には有利な立地であったが、軍事的には脆弱な都市であった。そのことが北宋の政治情勢を不安定にし、金の圧迫に耐えられず杭州に移動する（南宋）原因ともなった。

(2) 分析に使用する史料

本研究の対象である「宋本」は、北京の故宫博物院に所蔵されている。絹に描かれてから約900年を経ているため傷みがひどく、長く公開されていない。著者は、1959年に北京の中國古典藝術出版社から出された写真コピーを使用する¹⁾。これがわが国で入手し得る最上の複製であろう。「宋本」のオリジナルは縦24.8cm、横528cmであり、この複製¹⁾は19枚に分割されている。本論文では分割された田園風景から都市まで右側から順番に付された番号No.1からNo.19を便宜上使用する。

(3) 「宋本」全体の構成

No. 1 から No. 4 までは田園（農地）の風景である。この部分にのみ画題の清明節に関わる風景が描かれている。汴河支流と思われる小水路がある。

No. 5 から汴河本流が現れる。汴河は大運河の一部として、黄河と淮河を結び華南の産品を北宋の首都開封に運ぶ主要な運河である（図-2）¹¹⁾。

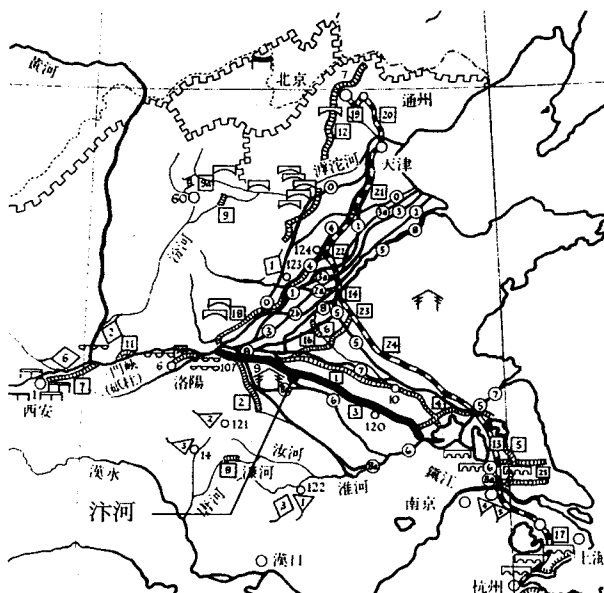


図-2 汴河の位置

また、現存する「宋本」は、左端の風景に到り突然終わる。張沢端の作画当時は左側にはさらに風景が続いていたとの推論もある。何かの理由によって切り取られたと想像する¹²⁾。もしそうであるならば、虹橋と鼓楼は画面全体を三等分する位置にあることになる。そしてたぶん、画面は、「右部分の田園」、「中央部の近郊の賑わい」、そして「左部分の都市内」の3ゾーン区分によって構成されていたと考えられる。

絵画全体の核は、その位置も中央である「虹橋」であり、今ひとつは左側にある「鼓楼」（この建築が「城門」であるとの説もあるが、ここではとりあえず鼓楼としておく）である。

画面全体に水面あるいは路面を隔てて、近景と遠景に分けられて描かれている中で、この二つの施設は画面の上下いっばいに広がっている。右方は虹橋を今まさに船がくぐろうとしているところである。一方の左方は、鼓楼を駱駝の団がくぐり抜けて、先頭は外部にでてきたところである。すなわちこの二つは、「清明上河図」の主要な画題のひとつである水運と陸運の象徴でもある。「南船北馬」といわれる華南の舟運、華北の陸運は、近世の中国の流通経済を特徴付けている。この「清明上河図」は、舟運と陸運の切り替え地点にある開封の地理的な意味を具体的に描いている。

(4) 「宋本」各部の特徴

本図右半分は汴河（運河）と舟運を主題にする。

本図の導入は、のんびりとした清明節の田園風景ではじまる。汴河に流れ込む前の小河川が畑の間を流れる。

墓参の団が奥に柳を挿した本図中唯一清明節を描く風景である（図-3）。



図-3 田園風景

汴河本流には約 25 隻の河船が見られる。汴河の流下方向についての知見はないが、本図では左から右に流れているらしい。船を曳く様子で推測される。

本流から掘り込まれた船溜が見える。船荷を陸揚げし陸上輸送に移す場所である。船からの荷揚げ人足は渡し板を伝って上下船する。いわゆる岸壁（quay）は見出せない。運河といえども水位の変化が大きく、岸壁への係船が困難だったのか、あるいは船の構造上の問題なのかもしれない。

No. 10 に本図の中心画題である虹橋が詳細に描かれている。橋上には多くの出店が開かれ、この付近の商業的賑わいの中心をなしている（図-4）。

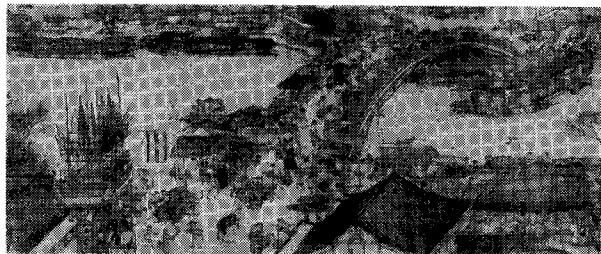


図-4 虹橋付近

北宋の首都開封の都市生活を詳細に記述した「東京夢華録」には、開封の東水門の外七里に虹橋がある、と書かれている。この地点のことであろう¹³⁾。ただし、「虹橋」は固有名称ではなく、アーチ型の橋一般の呼称であるため場所の特定は困難である。頻繁な船舶通行に備え、汴河全体に虹橋（アーチ型橋）は多く架橋されていたらしい。

この付近から都市は一段と上質になる。例えば建築の屋根は草葺から瓦葺になる。酒楼（料亭）には門飾りが付き、正店（本店）も現れる。

No. 13 から描かれた景観の中心は水路から一転して陸路に変わる。街路両側はほぼ商業施設（物販店、飲食店）で埋め尽くされる。街路上にはさまざまな職業の人々、人力家畜などによる多様な運搬手段が見える。No. 12 より前の図が運河と舟運をテーマとしていることに対し、No. 13 以降は街路景観と陸上輸送が主要なテーマのひとつとなっている（図-5）。



図-5 街路を中心にした街

No. 16 には、都市部景観の中心としての「鼓楼」が画面上下いっばいに描かれる。両翼に城壁がないので「城門」を否定する説が多いが、仮にこの建築が城門であるとするならば、下を通過しつつある駱駝の隊商が華北都市の“西門”のメタファーであることと結びついて、この門外の風景 (No. 1 から No. 15 まで) は、開封の西側城外ということになる (図-6)。

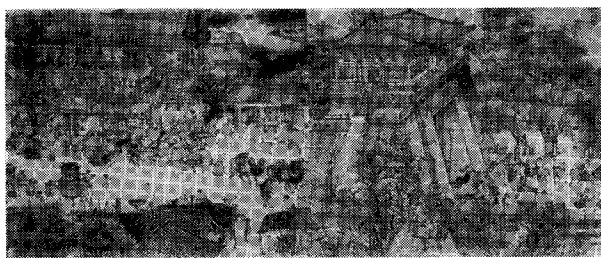


図-6 鼓楼付近

都市風景を見る本図の視点が南から北側を望むのか、北から南側を望むのかは問題として残される。本図の平面図化を試みた趙廣超は、『東京夢華録』の記述の「虹桥」を本図の橋とし、開封城外東南7里にその地点を特定した (図-7) ¹⁴⁾。

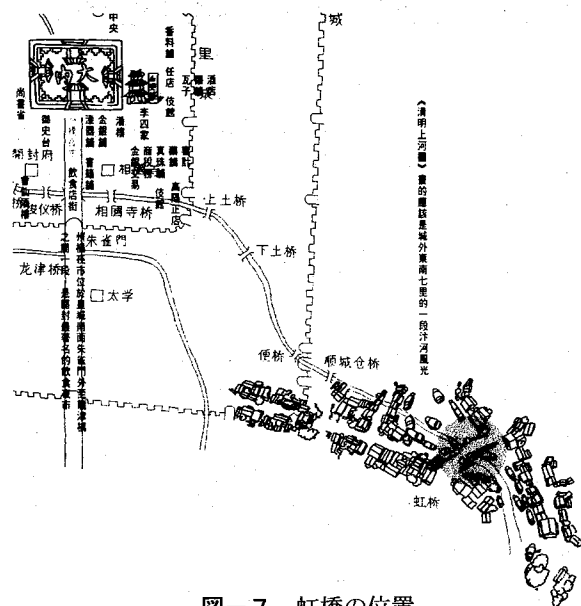


図-7 虹桥の位置

鼓楼を過ぎ、大きい十字交差点を過ぎたところでこの絵画は突然終わる。緻密に構成された本図であるが、この地点で終了すべき特別の契機は見当たらない。ちなみに「清院本 清明上河図」では、この城門 (清院本では城壁がある) 以降城内の商業の賑わいを描き、さらに最奥には宮殿が描かれ一連の風景絵画は終わる。

「清院本」が、「宋本」を直接に規範として描かれたと仮定すれば、(そして「清院本」作画時点で「宋本」の完全な姿の知見を得ていれば、) 本「宋本」の幻の左端部分は宮殿、あるいは同類の高貴な施設が描かれていたのかもしれない。そしてその高貴さ故に切り取られ別に所蔵されたという想像も生まれてくる。

本図の描画技法は「界画」と呼ばれる定規を使った描写精度の高い技法である。数ある「清明上河図」のうちで「宋本」だけが、この界画技法による部分が極めて少ない。ほとんど「虹桥」と「鼓楼」だけが界画技法によって描かれている。このことからこの2施設の本図全体に占める位置の重要性を認めることができる。もし、虹桥と鼓楼が図上で寸法的に対照的な位置にあると仮定すれば、鼓楼以降左側にさらに6図が加わることになり、これは城内の風景と宮殿が描かれるに十分なスペースである。

6. 土木景観の分析

(1) 水路

「宋本清明上河図」は、全体19図のうち12図までが汴河と推定される運河を中心に描かれている。

この運河の断面形状については幾つかの研究があるが、おおむね幅員は25m程度、水深は3-5m程度と推定されている。アーチ型橋の桁下空間は5mである。これらのスケールは、当時の運河を航行する船 (河船) の復元研究 ¹⁵⁾ にも合致している。

護岸は一貫して土羽のままであり、石材などにより補強されているのは橋梁の下部だけである。河船が係留され、物資の上げ下ろしが行われる船溜りでもこの状態である。黄河下流の沖積地域で産出する石材は少ない。貴重な石材は都市城壁、軍事施設に優先的に使用されたので、運河護岸にまではいきわたらなかったであろう。この状態は15, 16図の城市開封を囲む壕と思われる水系護岸でも同じであり、護岸は樹木、主に柳が植栽され固められている (図-8)。

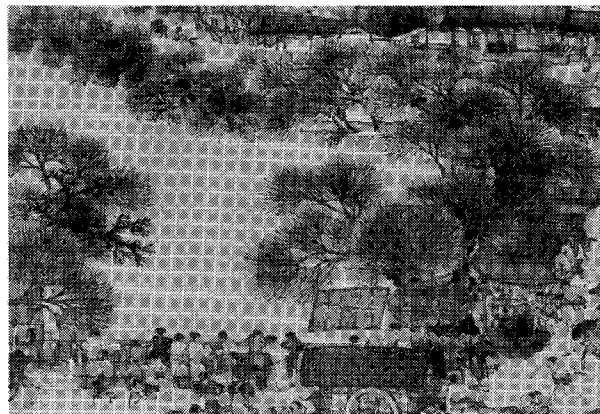
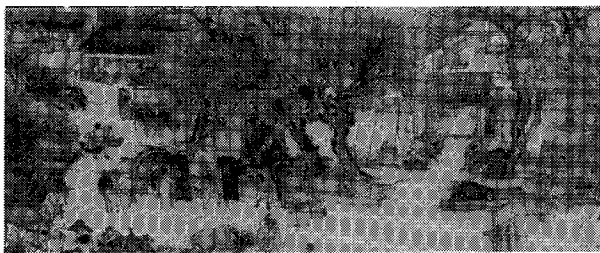


図-8 壕の護岸

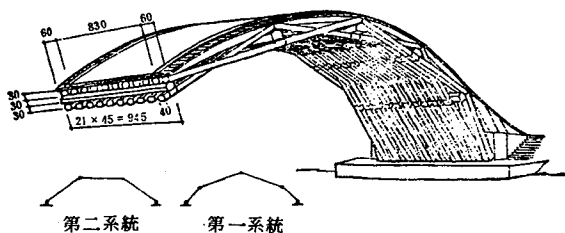
都市近郊の商店の賑わいが見られる地域に排水路が見える (図-9)。ここでは、垂直の木杭に横板を施したシガラ状の護岸がみえる。排水路の衛生上の理由なのか、土地利用が世知辛く、水際いっぱいまで道路として利用するためなのか？



図－9 排水路

(2) 橋梁

前にも述べたように「虹橋」の構造的な研究は多い。「虹橋」は固有の名称ではなく、アーチ形式の橋に名づけられている。河船を通すため、5m程度の桁下空間を生み出している。この形式の構造を、中国人研究者は「世界橋梁史上、わが国（中国：筆者注）の独創」と述べている¹⁷⁾。(図－10)

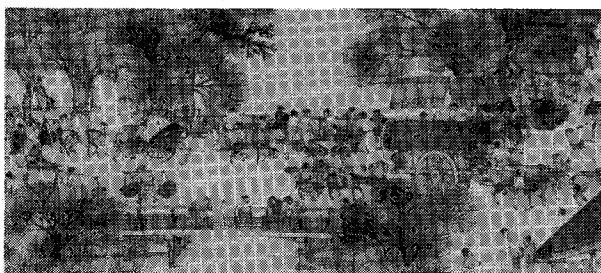


図－10 虹橋の構造

この虹橋は本図の中心を占め、景観的な主題をなしている。橋の幅員は約10m、橋長は約20mであり、橋上には屋台、路上の出店がならび多くの人々でにぎわっている。橋上の店舗は、ベネツィアのリアルト橋を思わせるが、このリアルト橋は「清院本」にみられる橋上店舗を持つ虹橋に時期も景観も近い。「宋本」では、未だ本格的な橋上建築物はみられない。

汴河本流以外の部分は、水平桁形式の橋が多い。小スパンの橋では、中央をむくり（持ち上げ）をつけ、路面は土でカバーされている。

鼓楼前面の壕に架けられた橋は幅員も広く、頑丈な桁構造で、高欄も設けられている。鼓楼下の通路から連続して石材で舗装されていたと想像される。(図－11)



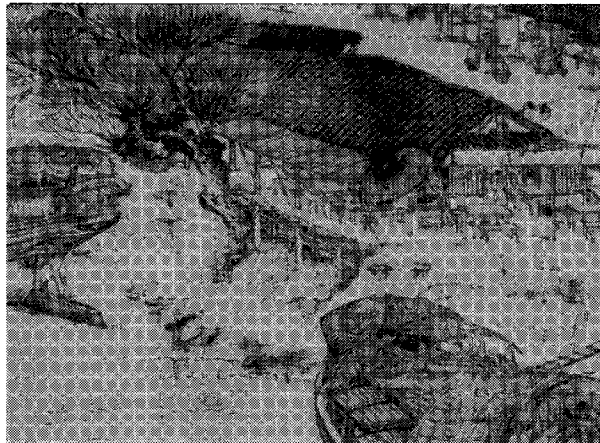
図－11 鼓楼前の橋

(3) 地盤

黄河下流域は西から運ばれた黄砂が堆積し、地形の安定性を欠く地盤が続く。運河の部分によっては周辺の地盤が高く天井川状の場所もある。

本図の右側田園地域では、地面は細かくうねっている。

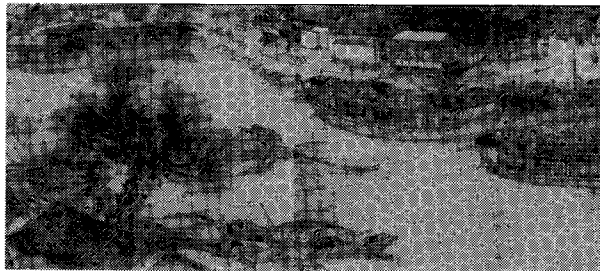
農地だけが水平で、華北の特徴としてあぜ道が大きく高く、畝が低い。集落の始まるあたりから地面は平面を保っている。また、船溜りでは、建築地盤と水面は2m程度離れ、一部では建築基礎付近の法面は木杭を使った小擁壁で保護されているが(図－12)、多くは覆われない土羽のままである。



図－12 木柵の小擁壁

(4) 街路・道路・舗装

運河沿いでは、河船を曳くための通路が、水面上1m高くらいに設けられている。この部分も舗装は施されていない。近郊、都市内を問わず、道路幅員を区画する施設は見当たらない。(図－13)



図－13 曳き船用の通路

唐期の坊牆制の時期、居住地域「坊」は障壁によって囲われ、その両側の障壁で区画されて道路形状は明快であった。ところが唐末よりこの坊障は崩壊し、家屋は道に向き店をなし、また路上に店舗を展開する侵街も発生し、道路区画はあいまいになってきたと想像される。

本図の鼓楼から左側を仮に城内とすれば、未だ坊障のラインを想像させるように街並みは直線的であるが、道路上を区画する線状の施設は見出せない。また、鼓楼から虹橋あたりまでの城外集落は、(このような城外の賑わい地は宋代に一般的になった)店舗個々がでこぼこに建ち、道路を規定するような壁面線の統一はまったく見られない。つまり、まず建築が占め、残りの空間が道路、通路になったのであろう。

商業経済によって自立した都市の景観は、従来の都城制都市のそれとは大きく異なっている。

7. おわりに

(1) 東アジア近世の都市景観

宋代の都市経済の発達は、それまでの都市内での商取

引場として限定されていた「市」が崩壊した。住居の街区を囲んでいた坊壁は大きく打ち破られ街路に店の顔を向けることになった。さらに城壁都市の城壁も越えて城外に店舗集落を形成し始めた。中世までの都城制都市の景観とはおおきく異なった経済都市は、東アジアではこの北宋の都市開封に最初に見出すことができる。10, 11, 12 世紀のことである。このような都市景観の転換は、東アジア各都市にも波及し、わが日本では 16, 17 世紀に見ることが出来る。

本研究を通じて、東アジアに発生した近世経済都市の都市景観の初期的な姿を知ることができる。

(2) 今後の研究方向

絵画史料を使用しての景観分析は、本図と同時期の他の都市の（いわば“水平的”）分析と、同じ「清明上河図」を時代を辿りながらその景観の差異を辿る（いわば“垂直的”）方法とがある。

前者の方法としては、残念ながら本図「宋本」と同時期の都市景観を分析できる史料を見出していない。

また、後者の方法として本「宋本」を規範（出発点）とし、その後の時期ごとの（再解釈の）「清明上河図」は、まことに頻繁に描かれている。そのうち最も詳細なものは 18 世紀乾隆帝に命じられ陳枚らによって描かれた「清院本 清明上河図」である。ここには清王朝最盛期の都市景観を見ることが出来る。

「宋本」と「清院本」を比較し、経済都市発生期と成熟した東アジア近世都市景観の変化を辿ることが出来るであろう。

本研究は中国語資料を多く扱ったため、何人もの中国人の友人たちに助けられた。それでもはじめたばかりのテーマであるために参照した史料は“手に届くところ”といった段階である。多くの諸賢のアドバイスを望んでいる。

参考文献

1) オリジナルは、北京故宮博物院に所蔵され、絹本のため長く公開されていない。本論文は、以下の複写を使った。

・宋・張叔端繪：『清明上河圖卷』，中國古典藝術出版社，1959 年

なお、最近下記の複写が出版された。落款、跋文など網羅しているが、複写精度は上記に劣る。

・故宮博物院藏『清明上河図』，天津人民美術出版社，2005 年

2) 伊原弘編：『清明上河図を読む』，勉誠出版，pp. 221～228，2003 年

3) 張安治著：『張叔端清明上河図研究』，p. 1，北京・朝花美術出版社，1962 年

4) 趙廣超著：『筆記 清明上河圖』，北京；生活読書新知三聯書店，卷末図の解説部分，2005 年

5) 孟元老著、入矢義高・梅原郁訳注：東洋文庫 598『東

京夢華錄 宋代の都市と生活』，平凡社，2003 年

6) Joseph Needham：『中国の科学と文明』第 10 卷，思索社，1971 年

7) 唐寰澄著：『中国古代橋梁』第 10 卷，北京・文物出版社，1957 年

8) 茅以昇著：『中國古橋技術史』，台北；明文書局，1991 年

9) 黒田日出男：『謎解き 洛中洛外図』，岩波新書，1996 年

10) 黒田日出男：『絵画史料で歴史を読む』，ちくまブリマーブック 153，2004 年

11) Joseph Needham：『中国の科学と文明』第 10 卷，p. 293，思索社，1971 年

12) 伊原弘著：『中国開封の生活と歳時』，pp. 30-31，山川出版，1991 年

13) 孟元老著、入矢義高・梅原郁訳注：東洋文庫 598『東京夢華錄 宋代の都市と生活』，平凡社，p. 36，2003 年

14) 趙廣超著：『筆記 清明上河圖』，北京；生活読書新知三聯書店，p. 6，2005 年

15) 王冠倬編著：『中国古船図譜』，北京；生活読書新知三聯書店，pp. 120-138，2001 年

16) 伊原弘編：『清明上河図を読む』，山形欣哉筆『清明上河図』の船を造る』，勉誠出版，pp. 166～203，2003 年

17) 茅以昇著：『中國古橋技術史』，pp. 103-104，台北；明文書局，1991 年